

防木ジャーナル

THE BOSUI JOURNAL

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

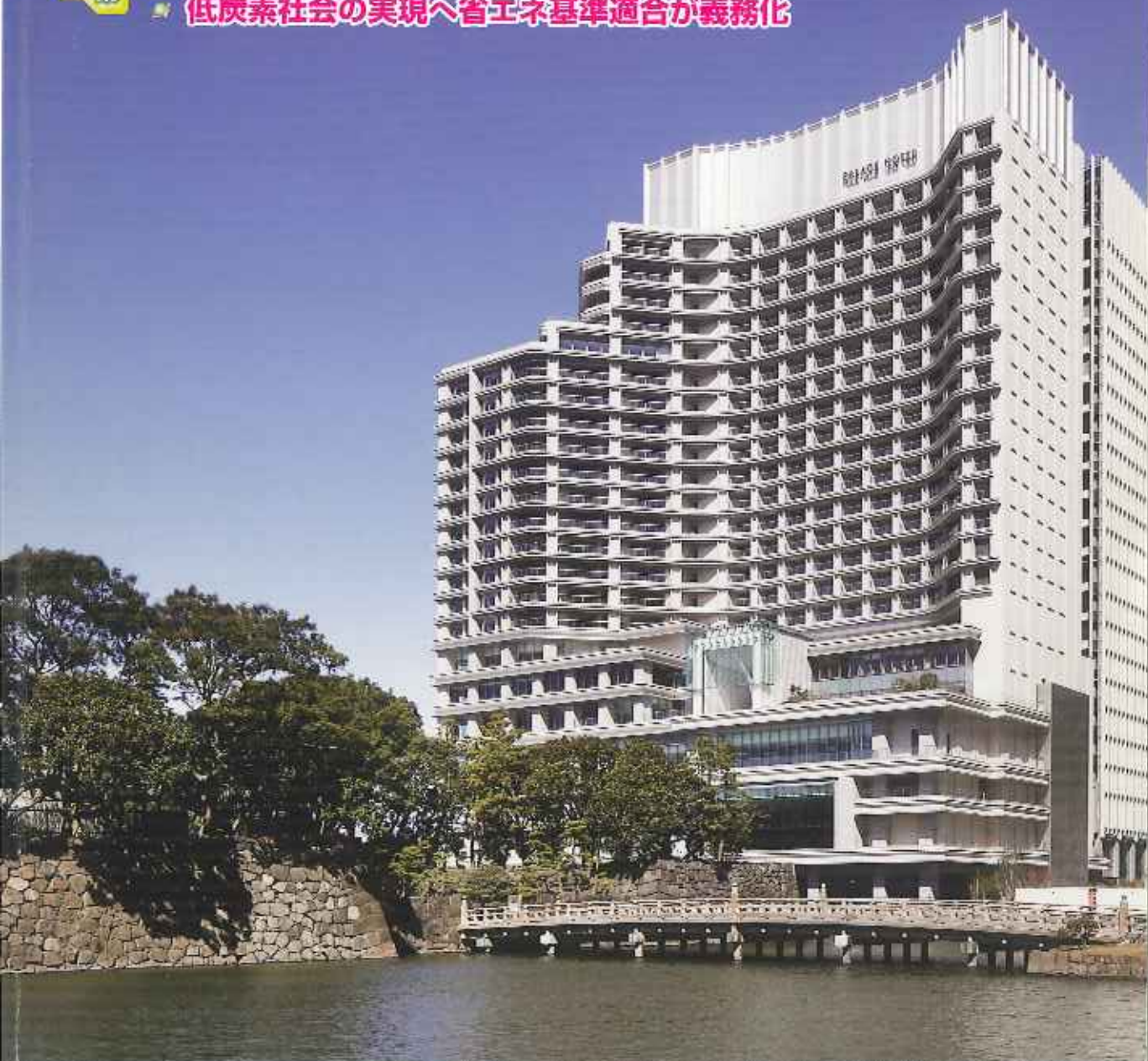
7

2012

No.488

特集

- 耐久性総プロの見直し
- 低炭素社会の実現へ省エネ基準適合が義務化



コンクリートの打継ぎのジャンカ

鈴木 哲夫

コンクリートの建物は、コンクリートの打込みに際して上部から落とし込むことになるため、往々にして打継ぎ部は、骨材分離を起こして砂利(碎石)が多くなる傾向が高く、ジャンカ(豆板)ができやすい。このような状態では隙間が多いため、打継ぎ部にシーリングを施工しても漏水を止められないのだ。

さて、ジャンカの語源はなんだろうか。英語では、「できの悪いもの」を意味するjunkの日本語読みがジャンク→ジャンキ→ジャンカとなり、コンクリートの打ち上がり状態の悪い部分をジャンカと呼んだけれい。また、天然痘にかかった痕のアバタに似ていることから「アバタ」ともいう。一方、豆板と言えば、大豆などを平らに固めた菓子のことであるが、砂利の固まった状態が菓子の豆板に似ているところから「豆板」と言うようになったとする説もある。

話を戻そう。ジャンカが一行につながった打継ぎ部を見たことがある。モルタル補修と塗装されていたことから、外見では不具合があるようには見えない。打継ぎ目地シーリングの節約と目地を消



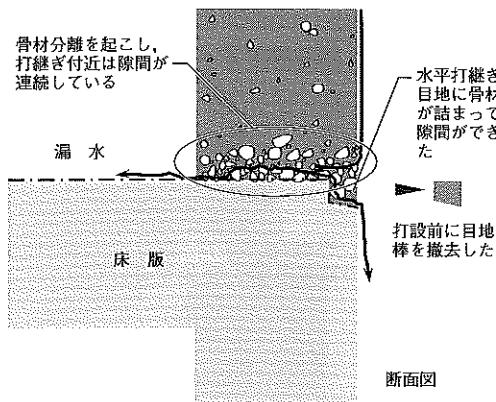
タイルの裏から出てきたコンクリートのジャンカ

したいという設計者の意図で目地棒を撤去して上部コンクリートを打ち込んだため、骨材が目地隙間に引っかかって空洞が形成され漏水したケースである。

さて、この漏水は、躯体表面に防水して直せるものであろうか。問題は、防水層が劣化していずれ性能を失い、再び漏水が始まることや雨水の継続した浸入があるとしたら塗膜の劣化を助長する。

したがって壁立上りの躯体打継ぎ部は、外見では見えない不具合が隠れているという盲点があり、漏水処理の判断を狂わせる典型的な部位である。ちなみに、この部分の隙間の有無を検証することは、比較的容易である。打継ぎ界面の壁厚中央付近を狙って斜め45°に一定間隔でドリル穿孔し、その穴に息を吹き込むと空気が抜けるかどうか確認すればよい。空気の抜け道は見えないが、内部に雨水の通り道があることだけは確認でき、この場合は、空隙すべてを埋める注入止水処理を施す以外にないのである。

(尙)鈴木哲夫設計事務所 代表取締役



上階の打ち込みでできた目地部分のコンクリートの空洞